



大垣市金生山化石館

化石館だより

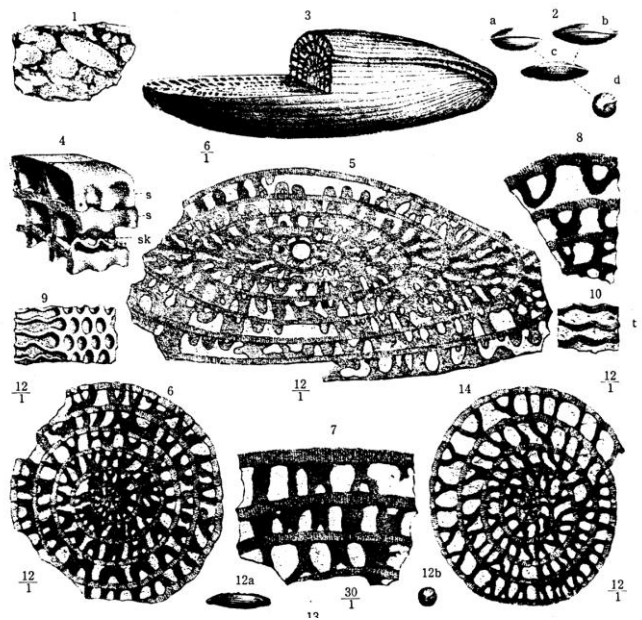
コラム

日本の古生物学発祥の地 金生山

岐阜県大垣市赤坂町の金生山は、「日本の古生物学発祥の地」として知られており、著名な学者の来訪や研究も多く「化石研究のメッカ」と紹介されることもあります。このことについては、保育社の原色化石図鑑に浜田隆士による詳細な解説が掲載されていますので是非ご覧ください。

化石に関する学問である「古生物学」が日本に入ってきたのは明治維新以後のことです。明治10年（1877年）に東京帝国大学に地質学教室が開設され、ドイツ人のお雇い学者であるエドムント・ナウマン教授による指導が始まりました。日本人が古生物学を学ぶようになるのはこの辺りからです。東京大学はこうした歴史をふまえて、東京大学こそが「日本の古生物学発祥の地」とであると称しています。これより以前、江戸時代においては、化石が古代生物の体の一部であるという認識をしていませんでした。近江の国（今の滋賀県）の愛石家である木内石亭は、金生山のウミユリ化石やサンゴ化石などについて「雲根誌」という書物に記録していますが、その姿形から「銭石」「花斑石」などと紹介しています。

東京大学に地質学教室が開設されるより3年前、明治7年（1874年）には、ナウマンの師であるギュンベルが日本産のフズリナ化石についてレポートしています。彼が報告したフズリナ・ジャポニカ (*Fusulina japonica* Gümbel) は、明治16年（1883年）のシュワガーによる、図を入れた詳細な記載によって世に知られるようになりました。日本産の化石について学術的に記載されたのは、このフズリナ化石が最初のもので、ギュンベルは来日していません。そんな彼が日本産の化石を報告できたのは、リヒトフォーフェンが持ち帰った標本を利用したからです。リヒトフォーフェンは東アジア探検団に加わり1860年に日本に立ち寄っています。その際、横浜で貨幣石を含む黒色泥質石灰岩の小箱を購入しました。ギュンベルが利用したのはこの小箱に含まれた化石でした。ギュンベルは貨幣石と見なされていた化石を精査しフズリナであるとして報告したの



シュワガー論文（1883）の図版（一部）

です。さて、リヒトフォーフェンは1870年にも2回目の来日を果たしています。その際は中山道を利用して上京したのですが、美濃赤坂で有孔虫を含む石灰岩を取得して持ち帰りました。そしてこの資料から、シュワガーは5種類のフズリナ化石を報告し、ギュンベルの報告したフズリナ・ジャポニカについても紹介しているのです。

リヒトフォーフェンが横浜で購入した石灰岩の小箱はどこで作られたものだったのでしょうか。彼は江戸の東方山地と記していますが、その産地は定かではありません。美濃赤坂で作られたものとも考えることもできるのです。金生山の石灰岩は、硯の石材として古くから利用されており、1830年ころには谷鼎による石細工が中山道を通る旅人に販売され人気を得ています。美濃赤坂の石細工が旅人によって横浜まで運ばれ、リヒトフォーフェンの手に渡った可能性は十分あるのです。

今年の2月11日に、金生山化石研究会が主催する化石講演会が開かれます。今回は、地学史に詳しい矢島道子先生が「日本の古生物学発祥の地 金生山 ～化石の研究はどのようにして始まったのか～」と題して講演されます。発祥の地に関する謎がどこまで明らかになっているのか是非講演をお聞き下さい。



お知らせ



企画展

岐阜県の化石 新生代編



開催中!

- 期 間 10月13日(土)～1月31日(木)
- 場 所 金生山化石館 2階展示室
- 内 容 瑞浪層群、東海層群の貝類や哺乳類、植物等の産出化石を展示し、堆積時の古環境について解説します。
- 入館料 一般 100円
(高校生以下は無料)
20名以上の団体は半額

化石講演会

「日本の古生物学発祥の地 金生山」

- 日 時 2月11日(月:祭日) 午後1時30分より 入場無料
- 会 場 大垣市スイトピアセンター 学習館2F
- 講 師 矢島 道子 先生 (東京医科歯科大学 等 非常勤講師 理学博士)
- 主 催 金生山化石研究会 大垣市文化財保護協会 (共催)

問い合わせ： 大垣市金生山化石館 電話 (0584) 71-0950 (ファックスも同じ)
Email kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp